

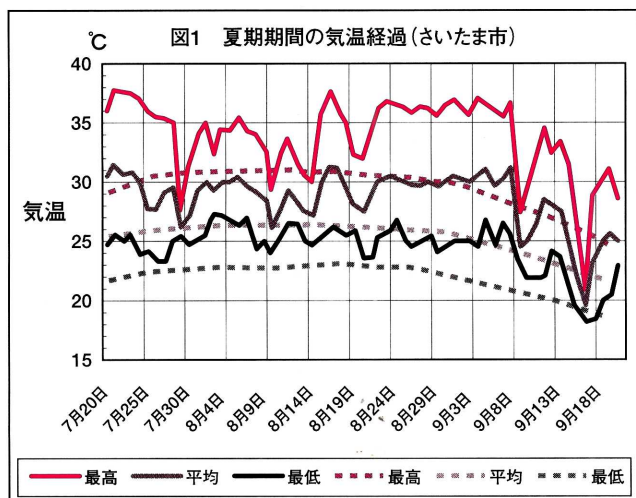
平成22年産の水稲の生育状況について

平成22年は、夏の記録的な猛暑により、水稲に大きな影響がありました。以下に、生育などの状況と今後に向けた主な稲作りについて述べます。

1 水稲の生育経過

平成22年は梅雨明け以降の平均気温が平年を約3℃上回る記録的な猛暑となり生育は促進されました(図1)。また、イネアオムシや紋枯病が発生したほか、全体的に籾は小粒傾向となり、収量は平年を下回りました。

2 水稲品質等への影響



程度の差はありますが、全品種、全作型で高温障害による収量や白未熟粒(背白粒、基部未熟粒)による品質の低下が発生しました。

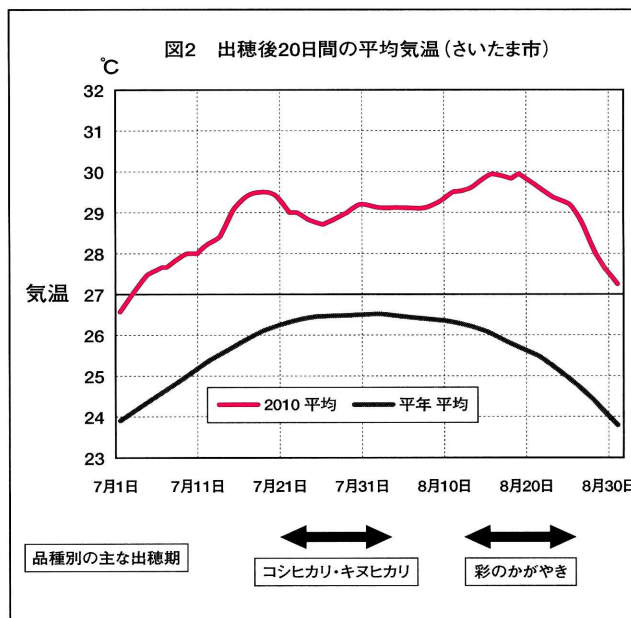
なお、平成22年産の品質低下の最も大きな要因としては、出穂後20日間の日平均気温が26～27℃を超えたことによります(図2)。

〈項目別の影響〉

- (1) **品種**：「彩のかがやき」「朝の光」などに著しい品質低下がありました。
- (2) **作期**：8月中旬頃に出穂し、高温に遭遇した作型で品質低下が顕著となりました。
- (3) **施肥**：平成22年は適切な追肥が行われ

た水田でも、肥料の分解が平年以上に進んだことで、全般に肥料不足の傾向がみられました。

- (4) **水管理**：7月中旬～9月上旬の降雨量がほとんどなく、稲体を一時的に冷やすこともできず、また、夜間の高温が生育に大きな影響を及ぼしました。



3 今後に向けた主な稲作り

(1) 土づくり

土づくりによって、特に登熟期後半の栄養不足を改善し、白未熟粒や充実不足粒の発生を抑制します。

(2) 深耕

作土層を厚くすることで、根張りを良くし障害を発生しにくくします。

(3) 水管理

適期の中干しと、穂ばらみ期から穂揃い期までは十分な深水を維持し、その後は田面水が切れたら入水する間断灌水を行います。

(4) 適正な肥料の施用

幼穂長の発育程度と葉色やヨードカリ反応などから、適正な穂肥を実施します。

その他、健全な稲作りのために、基本的栽培技術を励行しましょう。